

糸魚川市における地域づくり活動の着眼点を考察する

～先輩が「スキマ」をつくり、
「楽しさ」と「変化」で次世代につなぐ～

新潟県糸魚川市 廣川 一幸



1 はじめに

人口や地域経済が縮小する中、将来の人口規模に見合う生活環境を維持し、持続可能なまちづくりを進めていくためには、住民と地域、行政が共に考え、共に行動する協働の取組が必要となる。住民一人ひとりが、地域の魅力を再認識し、やりがいのある仕事や張り合いを感じられる地域活動を通じて、家族や地域が互いに支え合い、地域の魅力をみがき、次の世代につなげていかななくてはならない。

糸魚川市では、住民による自主的かつ主体的な地域活動を促すため、大きな2本の柱で地域づくりを進めている。

1本目の柱は、「地域づくりプラン」という地域づくり活動の基本となる計画の策定とその実現のための活動である。住民自らが地域の現状を把握したうえで将来像を描き、それを実現させるための課題を明確にして活動に取り組むものである。その活動には最長5年間の補助金が交付される。

2本目の柱は、「地域担当者制」である。公民館単位で構成される市内21地区に市職員が担当として張り付き、地域と行政をつなぐパイプ役として様々な要望や相談事に対応するほか、「地域づくりプラン」の策定と実現に密接に関わり、住民主体による地域づくり活動を促し支援するものである。

修了レポートでは、私が担当する4地区の「地域づくりプラン」に関わる活動を通じて感じた共通な課題「世代交代」に重点を置き、担当地域でもあり私の居住地でもある「西海地区」での行政職員と住民としての公私両面の視点を織り交ぜながら、糸魚川市における地域づくり活動の着眼点を考察していきたい。

2 糸魚川市の概要と人口ビジョン

(1) 糸魚川市の概要

糸魚川市は新潟県の最西端に位置し、西は富山県、南は長野県、北は日本海に面した海と山に囲まれた自然豊かな人口約43,000人、高齢化率37%の田舎町である。総面積約74,600haのうち約87%を森林が占め、南北には糸魚川静岡構造線（フォッサマグナの西端）が通り、日本の東西の境界線上に位置している。地質学的に珍しい土地や鉱物などを見ることができ、市全域が糸魚川ユネスコ世界ジオパークであるとともに、世界的にも珍しいヒスイの産地でもある。また、良質な石灰岩が産出されることから、セメント製造を始めとした鉱工業が盛んである。北陸新幹線の駅舎や高速道路のインターチェンジや長野県や富山県に通じる国道もあり、交通の便にも恵まれている。

(2)糸魚川市人口ビジョンによる人口推移と人口減少対策

人口減少は、1955 年（昭和 30 年）から既に始まっており、約 77,000 人いた人口も、2010 年（平成 22 年）では約 47,000 人となり、国立社会保障・人口問題研究所の試算では、2060 年（平成 72 年）には約 23,000 人まで減少すると推計されている。

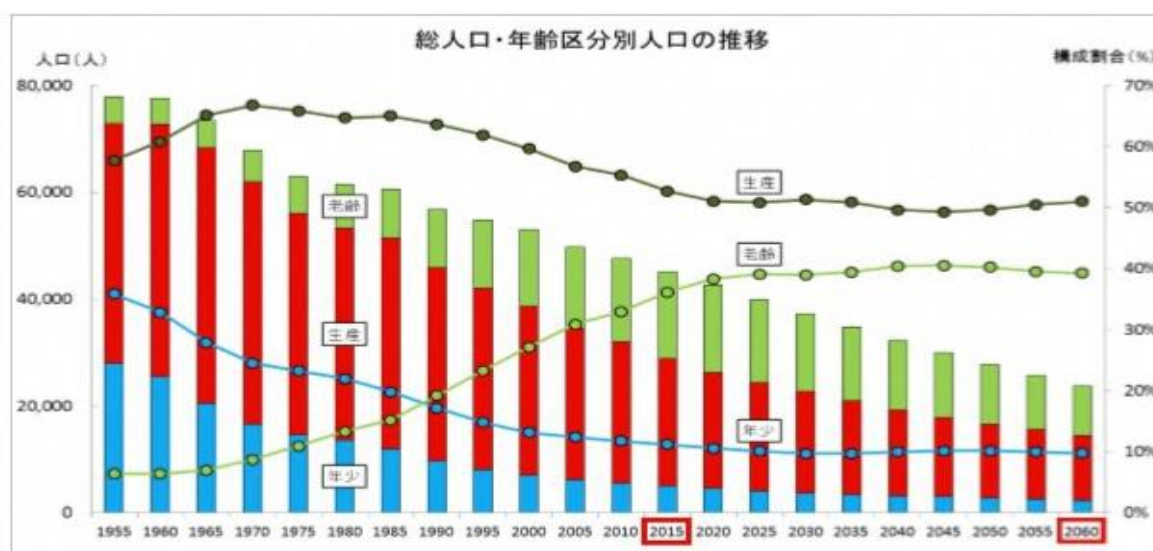


図 1 糸魚川市の総人口・年齢区分別人口の推移（糸魚川市人口ビジョン）

自然動態においては、県内他市と比較して合計特殊出生率が高位（平成 25 年で 1.68 県内 8 位）にあるものの、出生数は減少し続けている。加えて、死亡者数は増加傾向にあることから、自然動態全体では毎年約 400 人のマイナスとなっている。社会動態においては、全国的な東京一極集中の人口移動の状況の中、当市も首都圏等への人口流出が続いている。15 歳～24 歳での転出による影響が大きく、社会動態全体では 毎年約 250 人のマイナスとなっている。当市の人口動態は、自然減少と社会減少を合わせて、毎年約 650 人が減少し続けている危機的な状態である。

そこで当市では、人口減少対策の方向性として、住民と行政が一体となって糸魚川の資源を最大限に活かす 5 つのまちづくりの基本的視点を定めた。

- ①移住の促進 ～求める人財（ひと）獲得を目指して～
- ②Uターンの促進 ～ふるさと回帰に向けて～
- ③定住の促進 ～住み続けたいまちを目指して～
- ④出生数の増加と健康寿命の延伸 ～みんな元気なまちづくりに向けて～
- ⑤交流人口の拡大 ～魅力と活気あふれるまちに向けて～

移住やUターンを促進するには、まず受け入れる地域が魅力的でなければならない。私の所属する定住促進課地域振興係のミッションは、まさに「定住の促進」であり、地域の魅力をみがき、次の世代につなげていくことを念頭に置いて日々業務にあたっている。

3 「地域づくり」とは

(1)そもそも、地域づくりって何？

平成 28 年 12 月 22 日に発生した糸魚川市駅北大火。ラーメン店から出荷した火災は、乾燥した南からの強風にあおられ、消失範囲は約 40,000 m²、被災者は 145 世帯 260 人 55 事業所、火元から約 300m 離れた日本海沿岸まで燃え広がり、火災としては初めて風害による被災者生活再建支援法に適用されたほどの大規模火災となった。

その大火復興に向けた市民ワークショップを行っていたとき、参加者から「そもそも、地域づくりって何？」と疑問があがった。当たり前のように「地域づくり」「まちづくり」という言葉を使っていたが、いざ聞かれると何だろうと考えてしまう。その時は、次のとおり意見がまとまった。

「地域づくり」という言葉は、昔は無かったのではないだろうか？高度経済成長期の人口増加の時代には恐らく無く、人口減少が顕著になってきた近年にできたものだろう。「地域づくり」が無かった理由は、地域が強かったから。行政に頼らず自分達で何でもできたから。人口減少が始まり地域のマンパワーが衰退し、自分達の地域を存続できるか不安になったころから「地域づくり」が始まったのだろう。結局、「地域づくり」とは「地域を強くすることだね」と抽象的な結論でまとまった。

(2)住民主導と補助金

その時、行政職員の立場で 2 点言わせていただいた。

- ①これまでのような行政主導ではなく、住民主導による地域づくりをしていかなければなりません。行政は地域住民の支援に回ります。
- ②補助金ありきの地域づくりは、必ず失敗します。まずは、やりたいことがあって、それを達成するために補助金を活用しましょう。

これには理由がある。

地域担当業務 2 年目に関わった某地区の地域づくりプランの策定を始めた頃、地元自治会長から次のようなコメントをいただいた。

「プランの策定では毎回会議の進行と記録をしてもらって助かっているが、数年前、地域づくりの某補助事業を活用してみないかと行政から誘いを受けて取り組んだものの、地元で計画を作って市役所に持って行っても、「こんなんじゃダメ」と突き返され、住民主体であるべきとの理由から行政の関りが薄く、冷たい対応をされて困った。」さらに、別の地元の方からは、「某補助事業は一部の関係者に有利になるような事業展開となり、最終的に住民同士の関係性も悪くなってしまった。」という話も伺った。

先輩達には申し訳ないが、これまで行政が行ってきた「地域づくり」は少し間違っていたのかもしれない（失敗は成功のもととして、ご理解いただきたい）。勘違いしてはいけないのは、地域づくりにおける「住民主導」は「住民だけでやらせる」ではない。行政が地域にしっかり寄り添ったうえでの住民主導だと思う。寄り添う行政の対応が住民との信頼を生み、

関係は円満となり様々な問題を住民と一緒に乗り越えられる素地になると思う。

地域リーダー養成塾の現地調査でも、それを確信することができた。地域づくり活動が盛んな地域の共通点は、行政職員が熱心に地域づくりに関わっていることである。岡山県高梁市の「宇治地域まちづくり推進委員会」では、宇治地域の市職員 10 人全てが住民として部に所属していた。これは高梁市の中でも宇治地域だけだという。また、鳥取県智頭町では、役場の課長相当職員が地区振興協議会に副会長として参画している点にも驚かされた。行政職員が地域にどこまで深く関わられるかが、地域の盛り上がりを左右させると感じた。

何でもそうだと思うが、「やらされてやる」と「やりたくてやる」とでは、雲泥の差がある。成果以上に「継続力」に大きな差が出ると感じている。これまでの行政提案の地域づくりは補助金ありきのものが多く、補助事業の実績が欲しいがために住民に活用を促すが、住民は「やらされ感満載」となり、大半の活動は補助金が交付されているときのみとなる。または、住民も補助金だけを当てにした継続性の無い、その場限りの活動となるケースが少なくはない。

行政職員は地域に足を運び、住民を時には引っ張り、時には後押しし、時には共に汗をかきながら住民主導に導かなければならない。住民主導は、住民同士の話し合いから始まり、そこで生まれた必要な活動（こと、もの）に対して補助事業（財源）を探すべきだと考える。

行政職員の地域活動の一環として、消防団について記載したい。

私自身、平成 29 年度で消防団活動が 21 年目となったが、私が入団する少し前までは、「市の職員は、災害が発生すると市の災害対策本部に従事するため消防団には入れない」と聞いていた。ところが、考え方が大きく変わり、「市の職員は地域活動に率先して参加すべき」として、現在、多くの職員が入団している状況である。恐らくはその頃から、人口減少による地域の人材不足が問題となってきたのだと思う。それまであった「青年団」が人材不足で解散したのもその頃であった。行政職員だからといった特別扱いは通用しない時代となり、同時に地域づくりの波も大きくなってきたように感じる。個人的には、入団により年齢や職業を超えた仲間と出会えたことは、自分の人生にとって非常にプラスであったと実感している。

(3)地域づくりの範囲とは

当市では「糸 JAM (いとジャム)」という、市内の様々な若者達 (20~40 歳代) が住んでいる地域を越えて集まり、互いの考えや活動について意見交換を行う集まりを平成 29 年度からスタートさせた。当初は、若者がつながり市全体のまちづくり活動を起こしてほしいと考えていたが、現時点では地区を超えての活動には発展していない。

「糸 JAM」を通して感じたことは、地域（づくり）活動を活発に行う人材が集まっても、集落や地区を超えて市全体のまちづくり活動をすることは簡単ではなく時間がかかるということである。地域づくりは、心を許す楽しい仲間と地域への愛着があってこそ始まり、集落→地区→市の順に時間をかけて範囲が大きくなっていくものだと感じた。市町村が豊かに

なるためには集落や地区が、都道府県が豊かになるには市町村が、国が豊かになるには都道府県が豊かでなければならないと思う。リーダー養成塾講師の結城登美雄氏が述べた「地域とは家族の集まりである」の言葉は衝撃的であった。自分の集落においても、跡取りがいないがために家族が消滅し、空き家となっているケースがある。空き家の増加は、集落の衰退を測るバロメータだと思う。やはり、家族が集まって集落が形成されていることに気付かされる。逆に言うと、家族を維持できれば集落も維持できるとも感じた。

4 人は無い物ねだりする生きもの？（都会への流出）

人口減少。特に若者が都会に憧れ就学や就職を機に田舎を出ていく。その反面、近年「地域おこし協力隊」や「孫ターン」のように、都会の物の豊かさよりも地方の人とのつながりのある生活の豊かさと自己実現に夢を抱き移住してくる若者も現れている。まさに、人は無い物ねだりする生きものだと思う。

地域リーダー養成塾講師の高橋博之氏の話にもあったが、都会のバーチャルで希薄な人間関係から、地方のアナログで濃密な人間関係を求めて移住する若者が増えてきていることにホッとす。人間らしくて良いと思う。

無い物ねだりで地方への移住が今後さらに進み、流行のように一定の周期で人口増加が都会と地方で交互に繰り返されるのではないかと考える自分は浅はかである。都会の若者が地方に移住する以上に、地方で生まれた多くの若者が無い物ねだりで都会に憧れ出ていってしまう現実がある。地方では家族の維持も簡単ではない。

5 危機感を与えて他人事から自分事へ

人口減少と少子高齢化の中、住民主体となって地域づくり活動をするうえで必ず必要となるのが、自分事として考えられるかである。「あいつら好きだからやってるんだ」「俺には関係ない」と言う住民は少なくはないが、それでは行動は生まれず地域づくりは始まらない。できるだけ多くの住民を巻き込んで、他人事から自分事に考え方を変換させる必要がある。変換させる方法としては「危機感を与える」ことが有効だと感じている。増田レポートは全国の市町村に危機感を与え、他人事から自分事に変換させた点においては有効であったと思える。

そこで自分が取り組んできた地域づくりプランの策定について記載したい。

地方創生の地方版総合戦略策定のため、当市では公民館単位 21 地区で住民の意見を聞く地区懇談会（ワークショップ）を開催した。人口ビジョンによる人口減少を地区ごとに示して危機感を与える反面、藤山浩氏の田園回帰 1%戦略でシミュレーションを行い、対策と減少緩和の可能性を伝えた。危機感を持ち自分事として捉えることができた地区には、更に話し合いの場を設定し、熱量の高いメンバーに若者と女性を加えて地域づくりプランの策定に取り組んだ。



写真 1 地区懇談会の様子

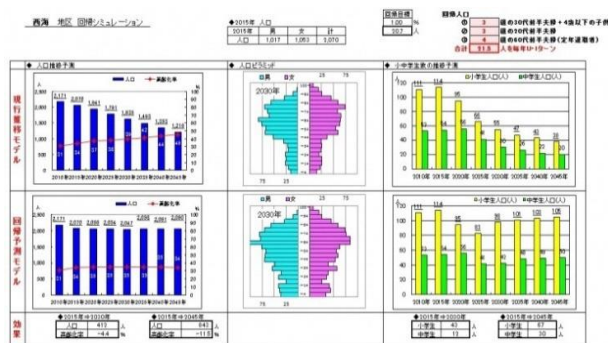


図 2 田園回帰 1%戦略を用いたシミュレーション

地域づくりプラン策定に取り組んだ地区の一つが、私の居住地でもある「西海地区」である。西海地区は、現在人口約 2,000 人だが、43 年後の 2060 年には 7 割減少し、598 人まで人口が減ると推計されている。高齢化率は 34%で地区全体としてはそれほど過疎化を感じないが、山間地に目を向けると高齢者のみ世帯が多く見受けられる。平場では宅地造成が進み移住者も多く人口は横這いであるが、その反面、隣近所との関係は希薄となり、地区行事への協力が得にくい状況も見受けられる。まさに地区内において、日本の都会と地方の縮図を見ることができる。

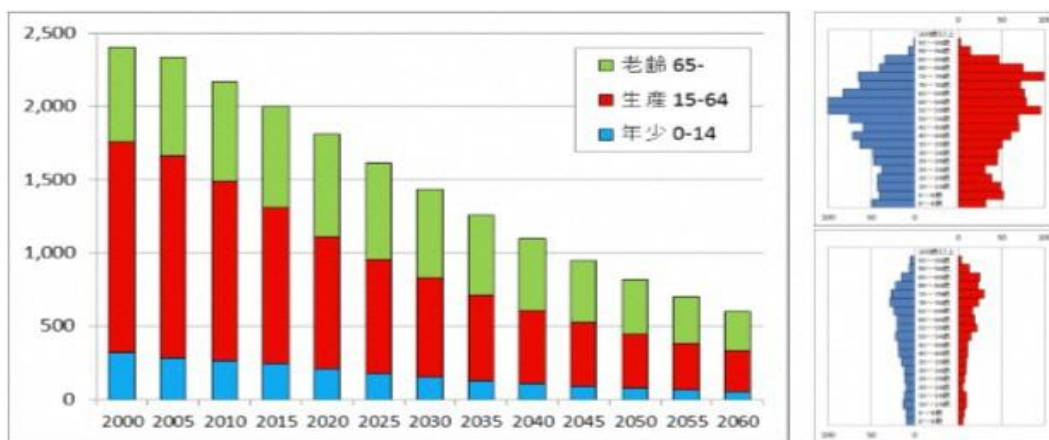


図 3 西海地区の総人口・年齢区分別人口の推移 (糸魚川市人口ビジョン)

6 成功の秘訣は「まずはやってみる」 ～対話から行動へ～

西海地区の地域づくりプランは、前段の地区懇談会などの話し合いを含め約 1 年間延べ 10 回のワークショップを経て完成した。ワークショップのコーディネーターは NPO 法人に委託したが、テーブルファシリテーターとして毎回ワークショップに参加し、時には一住民の立場から意見をさせていただいた。

そうして完成した地域づくりプランの軸は、「交流」と「対話」と「行動」となった。



写真 2 西海地区 地域づくりプラン策定ワークショップの様子



図 4 完成した西海地区 地域づくりプラン

ワークショップを重ねる中で、「現状には困っていないものの、将来を考えると不安感がある」「住民同士による話し合いの場が必要である」といった意見が明確となってきた。人口減少と希薄化した人間関係により、人と人との心の距離が離れてきていることに気付いたのである。そこでまずは、人と人が繋がることを目的に、「地域内での新しい交流の場づくり」に重点を置き、「交流の歯車」を回すことにより「対話の歯車」が連動して回り、さらには「行動の歯車」が回り出すサイクルを目指したのである。

成功の秘訣は「まずはやってみる」ことだと思う。何事もやらなければ始まらない。言うだけでやらないのであれば言わない方がまだましである。私の知る限り、行動を起こす地域に共通する点は、「まずはやってみよう」というリーダーと、それを支える仲間がいること。

地域リーダー養成塾の現地調査で訪れた岡山県津山市の「NPO法人 スマイル・ちわ」と鳥取県智頭町の「山郷地区振興協議会」でも、それを強く感じる事ができた。人口減少と高齢化は全国すべての山間地集落の問題であるが、一歩抜き出た活動をしている組織には行動力のあるリーダーがいた。「とりあえずやってみようや」の言葉でみんなが動き、



図 5 交流と対話と行動の歯車のイメージ

楽しみながらやっている。「何かしないと終わってしまう。まずはやってみよう」の言葉が心に刺さった。

実は、西海地区の住民も先進地に負けず劣らず行動力がある。さらに言えば、「対話」より「行動」を起こしたい人間が多いかもしれない。「ワークショップだけだと面白くない。実際にやってみよう」と、地域づくりプランが完成する前に、試験的に交流会を行ったほどである。それには、コーディネーターをしてくれたNPO法人の動機付け（無茶振り）が何よりも大きかったが、それをしっかり受け止め、タイトなスケジュールにもかかわらず見事な段取りをした住民の団結力には目を見張るものがあった。その後の地域づくりプランの策定は加速的に展開し、他地区では類のないスピードと人とのつながりを重視した内容で完成に至った。

同じ方向を向き、一つの目標に向かって行動することによって、同じ釜の飯を食った仲間のように人と人との心の距離が近まり、より仲間意識が高まったのだと思う。さらには、「行動の歯車」と「対話の歯車」は連動しており、「行動の歯車」からでも「対話の歯車」を回せることを実証することができた。

7 行事の棚卸しと「中学生以上住民アンケート」

「交流」の実現を目指す中で問題となって出てきたのが、「交流したいが忙しくて参加できない」「一部の人に役が集中している」「行事が多すぎる」といった内容であった。これは西海地区だけではなく、どこの地区に行っても見受けられる。一度役を受けると、ドンドンと増えてくる。本人は大変であるが、傍から見ると「あの人は好きだからやっている」と誤解されることさえある。

集落の行事や祭りなどでも、人口が減少しているにもかかわらず昔と同じやり方で行われているケースは少なくはなく、平日であっても当番であれば仕事を休んででも参加するのが当たり前といった集落もある。住民は疲弊し、さらに人が出て行ってしまふ負のスパイラルがそこにはある。

そんな中、地域の行事を見直そうと平成 29 年 10 月に当市で初めて「中学生以上住民アンケート」を実施した西海地区の例を紹介したい。これまでの住民アンケートは、「1 世帯 1 アンケート」が主流であった。アンケートを回答するのは、概ね世帯主又は年配者であったはずである。後述するが、年代によって考え方や価値観は異なっており、「1 世帯 1 アンケート」では次の時代を担う若者の意見が反されないのは当然である。

そのうえで実施した「中学生以上住民アンケート」の結果は、行事の棚卸しだけではなく、様々な角度から幅広い住民の考えや思いを把握することができた。対象者が 1,891 人と多かったにもかかわらず 1,426 人から回答（回答率 75%）があったうえに、記述欄への意見記載も多く、地域づくりへの関心の高さを知ることができた。現在、分析途中ではあるが、「重要度」と「魅力度」の尺度から、改善または休止もしくは廃止の必要がある行事が見えてきた。大掃除の時の荷物処分のように、いつか使うだろう（廃止は悩む）といった荷物（行事）は、部屋から荷物が溢れているようであれば、捨てる（廃止する）勇気が必要だと思う。

問 7 西海地区の行事 重要度・魅力度

行事の重要度・魅力度についての住民意識評価

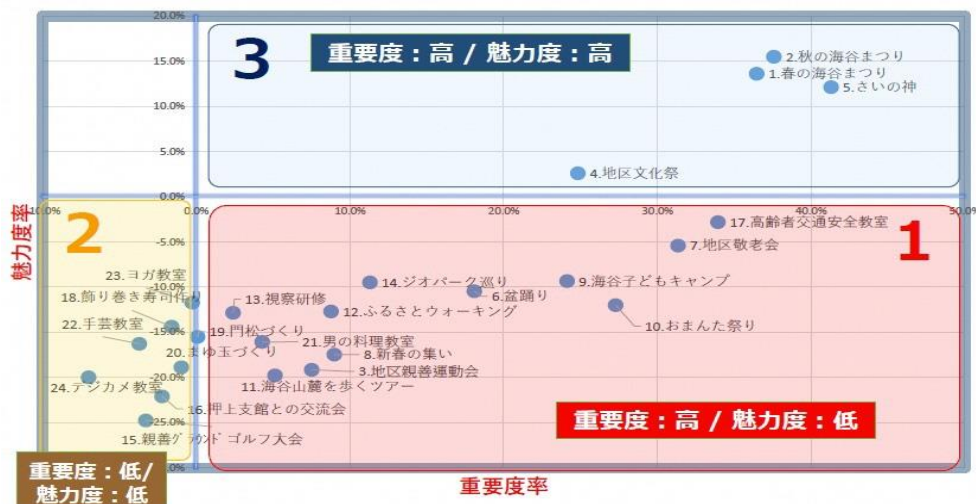


図 6 西海地区「中学生以上住民アンケート」 行事の重要度・魅力度

「中学生以上住民アンケート」の結果によって、住民の考えと意思の「見える化」ができた。特筆すべき点は、「西海地区に住み続けたいと思う子供が多かった点」と、「若者や移住者に期待している年配者が多かった点」である。子供の結果を知った時は目頭が熱くなったと同時に、「子供達を裏切らない魅力ある地区にしなければならない」と、大人として責任を感じた。また、年配者の思いも、「次世代につなぐ」という観点から非常に心強く感じた。後述するが、若者達の考えを相手にしない年配者は少なからずおり、そういった地区では、役員の高齢化や偏りが顕著で活動に若者の顔が見えてこない。西海地区では「若い人と高齢者の交流の場が欲しい」といった年配者の意見もあり、世代を超えて地区が一丸となれる追い風が吹いていると感じた。実際に、地域づくりプラン策定のワークショップの際も若者の意見は受け入れられ、活動初年度の予算の半分が若者主体の事業になるなど、若者の考えに対する年配者の理解は高まっている。

大切なことは、アンケートの結果を住民にしっかりと報告することであり、多くの住民が西海地区に高い関心を持ち、人とのつながりを求めているという事実を認識してもらうことだと思う。「世代を超えた交流の場を如何につくり、次の世代に如何につないでいくか」が、今後のテーマになると思う。そして、これまで地域づくり活動に参加していなかった仲間と一緒に考え、行動を起こすチャンスでもあると感じている。

8 「同世代の仲間を増やす横軸」と「次の世代にバトンをつなぐ縦軸」

当然ではあるが、人は年を取りいつか死んでしまう。優秀なリーダーも同様である。家族や地域も、その後に続かなければ終わってしまう。地域づくりには、「同世代の仲間を増やす横軸」と、「次の世代にバトンをつなぐ縦軸」があると思う。

地域のリーダーに一番必要なものは、行動力でも求心力でもなく、縦軸となる次のリー

ダーを育てることだと私は思う。約 5 年前、当市で 1 番目に地域づくりプランを策定した某地区には優秀なリーダーが存在し、地域住民を引っ張り、様々なイベントや共助活動などを通じて人々の絆が深まった。だが、そのリーダーはこう言う。「自分は精一杯やるが、次（の人）はどうなるか知らない。若い者は当てにならないので、自分達で頑張っていく」と。様々な考えがあって良いと思うし、さすがリーダーらしく「自分ができることはしっかりやるんだ」といった考えは見習わなければならない。しかし、優秀なリーダーが単発的に現れるのは極稀だと思うし、現れなければ地域が衰退する恐れがある。鈴木義幸書の『リーダーが身に着きたい 25 のこと』には、「どんな素晴らしいリーダーも、次のリーダーを育てられなければ、最終的に「あの人は偉大なリーダーだった」と評価されないのではないのでしょうか。少なくとも企業という永続性が求められる組織の場合はそうでしょう」と記されている。私は企業だけではなく、永続性が求められる地域においても同様だと思う。

9 「スキマ」をつくって若者にやらせてみる

また、次のようにも記されている。「本部長は、～略～ 部下が新しいことにチャレンジしようとする、どこかでそれを潰そうとするような動きをするんですよね。自分が気付き上げてきたものを崩されたくないんでしょ」と。

私が地域担当者として関わってきた 4 地区においても、同様に感じる場面を何度か見てきている。私も若僧だが、普段は地域のリーダー達と対等にお話しをさせていただいている。しかし、リーダー達が地元の若者達と接する場面になると、上から目線で若者達の意見を殆ど相手にしなくなる。私に対しては、行政職員という立場があるうえでの会話なのだろう。

年配者は、いきなり年配者になったわけではない。若者の時代を経験している。若者の気持ちも分かるはず。逆に若者が年配者の気持ちを理解することは、経験をしていないので難しい。ならば、年配者が自分の経験を生かして若者の考えを理解し、若者の気持ちを考えながら導き、任すことが重要だと感じている。具体的には、若者の発言や行動を最初から否定・批判しないことである。否定・批判されると、若者は年配者に近付かなくなる。当然、会議や行事などにも参加しなくなる。

ゼミナール講師の凶司先生の言葉を借りると「スキマをつくってあげる」ことが、今、地域づくりに一番求められていることだと強く思う。年配者は、活動をやめるのではなく、少し横に移して若者達が地域活動に入って来れるスペースをつくってあげるのである。若者は経験が未熟であるため、失敗することもある。しかし、年配者は若者の発言や活動を否定・批判するのではなく、自分の経験を生かした助言をしたり、お手本を見せたりしながら、若者にやらせてみる必要がある。

10 互いの価値観を理解し、継続と変化を！

世代間の交流を行ううえで、まず理解しなければならないことは、年代によって関心や興味、考え方などの価値観が異なっていることである。

昨年実施した年代別のワークショップでは、価値観の違いを確認することができた。困りごとランキングを行った結果、「結婚に関すること」と「農地、山林の維持管理のこと」については、若者では下位、中高年では中上位にランキングされた。逆に、「仲間と気軽に集まる場所がないこと」については、若者では上位、中高年では中下位にランキングされていた。結婚に関しては、若者にとって「余計なお世話だ」といったところである。まずは、年代によって価値観が違うということを前提に、互いの価値観を理解していくことが、世代間の交流には必要不可欠だと考える。

米国の経済学者ピーター・ドラッカーは、「社会は、継続と変化の双方が実現して発展する。組織もそうだ。継続と変化の相克をいかに乗り越えるか。継続だけでは衰退する。変化だけでは組織でなくなる」と唱えている。地域も同じことが言えると思う。継続と変化は両輪であるが、特に時代に合わせて変化していくことが重要だと思う。

継続と変化については、私が所属しているコミュニティ組織についても言える。30名ほどの名簿の中では、私が実質一番年下である。会則では、西海地区住民全員が会員という位置付けだが、実際のところの活動は役員だけで行っている。私の同年代の仲間は少なく、入りたいとも思っていない。60～70歳代の主要メンバーが30年ほど前に立ち上げた組織で、次の世代の育成が無いまま現在に至っている。

私が思うのは、今の組織の理念やイメージに賛同できる若者がどれだけいるかということである。組織を継続させるためには変化が必要であり、時代に合わせて組織の理念を変化させることが必要だと思う。さらに言えば、30年ほど前に立ち上げた主要メンバーのように、40歳前後の自分達の仲間を中心に時代（自分達）に合った組織を立ち上げることも有りだと思う。名称が変わろうとも、西海地区の地域組織としては継続できたことになると思う。

11 「楽しさ」無くして「継続」無し

継続の話をしてきたが、何よりも根本に「楽しさ」がなければ活動は始まり難いし、継続することも難しいと思う。前述した、西海地区が「まずはやってみよう」と地域づくりプランの完成前に行った試験的な交流会の開催理由は、「話し合いだけではつまらないので、単に飲んで食って話して楽しみたかった」というのが本音だと思う。

地域リーダー養成塾の現地調査で訪れた岡山県津山市の「NPO法人 スマイル・ちわ」の國米理事長も「とりあえずやってみようや」で行動を起こしていたが、その後に「必ず飲む」とのことであった。確かに、飲コミュニケーションは、世界共通のコミュニケーションツールだと思うが、飲むことが大切ではなく、仲間と一緒に楽しみ、何よりも「自分が楽しめるか」ということが大切だと思う。スタッフの楽しさが伝わってくるイベントほど魅



写真3 西海地区 楽しい交流会の様子

力的なものはない。「楽しさ」こそが、行動とその継続につながる原動力になると確信している。

12 最後に

なぜ西海地区の地域づくり活動が比較的うまく進んできたのかと考えると、2点ほど要因が思い浮かぶ。

1点目は、理解と行動力のある優秀なリーダーが複数名いたこと。自治会長と公民館長という2人の優秀なリーダーと、女性や若者等のグループをまとめる各リーダー達が「地域づくりプラン」の下に集まり、西海地区の将来という一つの方向に向かって連携できたことは成功の要因であったと言える。

2点目は、地区住民の穏やかで温かな人柄だと思う。「中学生以上住民アンケート」の結果でも、「西海地区の魅力・自慢」の1位が「豊かな自然」、2位が「温かな人間関係」となっている。私の知る限り、人の足を引っ張ったり、批判したりする人の割合が非常に少ないと感じている。この「批判しない」ということが、若者を含めた住民相互の人間関係構築に大きく影響を与えていると感じる。

では逆に、西海地区の今後の課題について考えてみると、そこには糸魚川市全体における共通の課題が見えてくる。それは、「役員の偏りと行事の多さ」である。同じくアンケートの結果でも、30歳以上の全ての年代で「改善してほしいこと」として意見が挙がっている。

まさに、今この時代に求められていることは、「変化」だと言える。これは、地域づくり活動だけではなく、民間や行政の仕事においても同様である。人口減少により地域や職場の人材が減っている中、これまでと同じ活動や仕事を行ってはいけず皆疲弊してしまうのは当然である。時代に合わせて「変化」する勇氣と行動力が必要なのである。そのためには、多くの人の「考えと意思の見える化」が必要であり、地域づくり活動においては、「中学生以上住民アンケート」が大きな効果を発揮すると考えている。

私は、西海地区を皮切りに、残りの担当3地区においても「中学生以上住民アンケート」の実施を促し、「行事と組織の見直し」を軸に自らファシリテーターとなり、アンケート結果を踏まえた話し合いと交流の促進に力を入れていきたいと考えている。多くの仲間が地域を支え、次の世代に無理なくつないでいける地域の実現に向けて、「変化」を促す起爆剤として関わっていきたい。

【引用・参考文献】

- ・糸魚川市『糸魚川市人口ビジョン』2015年
- ・藤山浩『田園回帰1%戦略 地元の人と仕事を取り戻す』（農山漁村文化協会）2015年
- ・鈴木義幸『リーダーが身に着きたい25のこと』（Discover 21）2009年
- ・『入門ピーター・ドラッカー-8つの顔』（週刊東洋経済 2001年 6.9-7.28）
<http://www.iot.ac.jp/manu/ueda/interviewJ.html>